

下田歌子小伝

下田歌子と実践女子学園の歩み



常盤の松は 歌子

ひらく空の

はらく空の

天の光くさの 橋

はゆあひく

ふゆ（空の

はらく空の

実践女子学園

下田歌子小伝

下田歌子と実践女子学園の歩み

常磐の松の

したかげに

ひらく教の

には桜

君がめぐみの

つゆあびて

にほへ八嶋の

外までも

歌子

実践女子学園校歌 下田歌子先生書
(実践女子大学・同短期大学部図書館蔵)

はしがき

綾錦 着て帰らずば 三国山

またふたびは 越えじとぞ思ふ

下田歌子は、1854年に美濃国恵那郡岩村藩（現在の岐阜県恵那市岩村町）に、藩士の長女として誕生します。時代は江戸から明治へと移り、1871年、16歳になった歌子は父に続いて上京するのですが、故郷を出る際の意気込みと決意を込めてこの歌を詠みました。

明治という時代、日本の女性の社会的な地位は低く、その生活や労働は厳しいものでした。下田歌子は、ときの明治政府から命を受け、2年間、イギリスを中心に欧米8か国を歴訪しました。そこで先進諸国の女子教育をつぶさに視察した歌子は、日本では女子教育が立ち遅れていること、女子教育こそが日本の近代化と女性の社会的地位の向上には重要であることを確信します。そして、帰国後、歌子は、「女性こそが社会を動かす」という強い信念のもと、1899年に実践女子学園を設立しました。

2019年に創立120周年を迎えた本学園は、今日までその信念を脈々と受け継ぎ、現在では、実践女子大学、実践女子大学短期大学部、実践女子学園中学校高等学校における「建学の精神」・「教育理念」として掲げております。

〔建学の精神〕 女性が社会を変える、世界を変える

〔教育理念〕 大学・短期大学部：

品格高雅にして自立自営できる女性の育成

中学校高等学校：

堅実にして質素、しかも品格ある女性の育成

こうした下田歌子の思いや業績を多くの人々に伝えるために、本学園では、歌子逝去後の1943年に『下田歌子先生伝』を作成しました。また、1982年には、学生・生徒の皆さんが手軽に読めるよう、『下田歌子先生小伝』(旧版)を作成しました。

しかしながら、『小伝』が出されてからすでに40年が経ちました。そこで、このたび、『小伝』を全面改訂し、『下田歌子小伝—下田歌子と実践女子学園の歩み』として発行することになりました。この小冊子をとおして、創立者下田歌子の思いと本学園の歩みについて、皆さんに分かりやすくお伝えしたいと思います。

2022年1月

実践女子学園 副理事長

実践女子大学・同短期大学部 学長

難波 雅紀



牧野和子『きらりうたこ』より
監修 実践女子学園 (小学館スクウェア 2011)

旧版『下田歌子先生小伝』

はしがき

本学園では、毎年入学式に当たり本学創立者下田歌子先生の略伝と教育精神を式辞のうちに披露し、新入学生・生徒の皆さんに学園生活を有意義に送ることをお願いしています。

しかし、式辞として述べる場合は、意あっても言葉で十分言い尽くせない憾^{うら}みがありますので、この度、下田歌子先生の研究者である本学園出身の山口典子氏にお願いして、先生の伝記及び教育精神をこの小冊子にまとめていただき上梓することになりました。

この小冊子を新たに入学される皆さんに、入学祝いとしてお贈りすることになりましたので、是非、座右の一つとして常に備えていただきたいと切望する次第であります。

1982年4月

実践女子学園 理事長・学長
多田 基

目次

はしがき

1	美濃の岩村に生まれる	1
2	上京	3
3	宮中出仕 — 「歌子」誕生	4
	【コラム】 宮中の衣服	
4	桃夭学校の開始	7
	【コラム】 下田歌子と津田梅子	
5	華族女学校の開設と学監就任	9
	【コラム】 女袴の考案	
6	欧米女子教育の視察と皇女教育	12
	【コラム】 欧米視察の航路	
7	帝国婦人協会と実践女学校の設立	16
	【コラム】 御料牧場・常磐松・校歌 【コラム】 実践女学校の制服	
8	清国留学生の教育	20
	【コラム】 秋瑾・孫文・西太后	
9	財団法人化と幼稚園の設置	22
10	大学設立構想と専門学校の設立	23
	【コラム】 陸奥記念館 【コラム】 源氏物語講義	
11	女子教育の普及活動と愛国婦人会の活動	28
12	顕彰碑の建立と逝去	30
13	下田歌子の想いを受け継ぐ	31
14	下田歌子の主な著作	33
	年表：下田歌子と実践女子学園	35

1 美濃の岩村に生まれる

1854年8月

下田歌子は、1854（嘉永7＝安政元）年8月9日¹、美濃国岩村藩（現在の岐阜県恵那市岩村町）に、藩士平尾録藏（1818-1898）と房（-1905）の長女として生まれた。幼名を銚（せき）という。両親と祖母貞（-1884）、弟の錦藏（1860-1923）という一家で育った。

銚の生家の平尾家は、岩村藩主松平氏に代々仕える武家であり²、曾祖父銚藏以来、学問に優れた家柄であった。銚藏には跡取りの男子がなかったため、1817（文化14）年に三女貞の婿として東条琴台（1795-1878）を迎えた。翌年、琴台と貞との間に録藏が生まれたが、琴台は藩内の学派の対立から、平尾家を去らなければならなくなった。

琴台は岩村を去った後、江戸に出て多くの著述を出版するとともに、朱子学者・洋学者として知られる佐久間象山（1811-1864）等と親交を深め、進歩的な儒学者として知られるようになった。しかし、海防等の必要性を訴えた著作『伊豆七島図考』によって幕府の咎めを受け、越後高田藩にお預けの身となる。以後、明治維新まで18年間、越後国高田（現在の新潟県上越市）で暮らした。こうして平尾



下田歌子の上京経路

- 1 下田歌子は嘉永7年8月に生まれたが、その年の11月27日に安政と改元されたことから、明治期に作成された下田の戸籍には、安政元年8月9日生まれと記載されている。また、下田の誕生日については、8月8日という説もあり、岩村で下田の81歳の誕生日に行われたとされる顕彰碑の除幕式は、8月8日に執り行われている。なお、この『小伝』では、下田の年齢は満年齢、他の親族の年齢は数え年としている。
- 2 江戸時代後期の岩村藩は石高三万石。平尾家は五十石取りで、藩内では中級以下の家柄だった。

家は、夫婦父子離別という悲運に見舞われたが、その後も銆の祖父琴台と父録蔵との交流は絶えなかった。

20歳で家督を継いだ父録蔵は、岩村藩の藩校^{ちしんかん}知新館で教える儒学者となる。しかし、岩村藩の中で起きた勢力争いに巻きこまれ、1858（安政5）年に謹慎を命じられて役職や家禄を停止される。6年後の1864年、ようやく謹慎を解かれたが、その頃、日本全土は幕末動乱期にあつて大きく変動していた。

そうした中、岩村藩は幕府を支持する佐幕派と天皇親政を主張する尊王派の二派に分裂していた。だが、鳥羽伏見の戦いで幕府軍が敗れた後、尾張藩の呼びかけにより、朝廷帰順の方向にまとまった。録蔵は、藩の内命を受けて尾張藩に出向し、勤王の証を立てるために奔走したが、1868（慶応4）年4月、任務を終えて藩に戻ると突如謹慎を命じられ、再び2年ほど幽閉された。

こうした父の不遇の中、祖母と母が平尾家の厳しい家計を切り盛りし、銆も幼少期から平尾家を支える一員として働いた。その一方、銆は幼いときから和歌や俳句、漢詩、絵などに非凡な才能を発揮する。

満4歳の元旦、銆は次の歌を詠んだという。

元旦は どちら向いても おめでたい

赤いべべ着て 昼も乳飲む

1860（安政7）年3月、銆5歳のとき、尊王攘夷を求める水戸藩脱藩者らが大老井伊直弼^{なおすけ}を殺害する桜田門外の変が起きた。銆はそのことを伝え聞き、次の俳句を吟じた。

桜田に 思ひ残りて 今日の雪



岩村の城址公園には、父の書斎の勉学所が復元されている。銆はここで和漢の勉強をした。

このように銆は幼い頃から才能豊かだったが、女子であるがゆえに武士の子弟のための藩校で学ぶことは許されなかった。そのため、銆は祖母から

読み書きを習い、父の書斎の書物を読んで、独学で和漢の知識を身につけた。こうした少女時代の厳しい生活や学問への渴望が、生涯にわたって女子教育に献身する原動力になったものと考えられる。

2 上京

1871年 満16歳

明治政府は王政復古の方針のもと、神道を国教として広めるため、1869（明治2）年に宣教使³という官職を設けた。録蔵は謹慎を解かれ、^{じんぎかん}神祇官宣教使史生に就任することになり、1870（明治3）年、妻子を残して上京した。越後国の高田にいた東条琴台も政府に徴されて上京し、神祇官宣教少博士に着任した。

しかし、翌1871年8月、神祇官の改革にともない、琴台も録蔵も官職を解かれ、その後、録蔵は官職に就くことはなかった。琴台は亀戸天神社の宮司となったが、眼を病んで失明し、1878年に84歳で亡くなった。

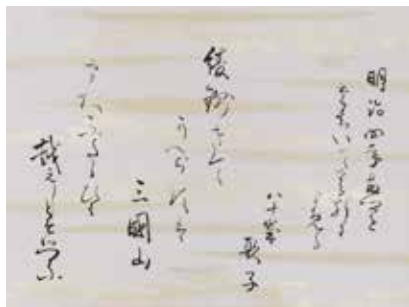
銆は、満16歳になった1871年4月、平尾家に長年仕えてきた高智文蔵とその娘 鉄とともに、故郷を出て東京の父のもとに向かった。^{かご}駕籠と徒歩による2週間を超える旅だった。この初めての旅の様子は「^{あずまじ}東路之日記」⁴として残されている。

銆が故郷を出るとき、三河・尾張・美濃の国境にある三国山の峠で詠じたという「綾錦」の歌がある⁵。

-
- 3 宣教使は1869年7月に太政官の下に設置され、同年10月神祇官の所管となる。神祇官は1871年に神祇省に格下げされ、翌1872年に廃止。それにともない、宣教使も廃止される。
 - 4 『香雪叢書 下田歌子著作集』第1巻 所収。1871年4月8日から20日までを記して、途中で終わっている。
 - 5 「東路之日記」では、上の句は「錦着て立ちかへらずば三国山」となっている。

綾錦 着て帰らずば 三国山

またふたびは
越えじとぞ思ふ



錦を着て帰るということは、立派に成功してその功績を持って故郷に帰るという意味であり、この歌には16歳の鉦の強い決意と大志

が込められている。現在、岩村城址公園には、この歌を刻んだ下田歌子顕彰碑が設置されている⁶。

その年の冬には、岩村に残っていた祖母貞、母房、弟銚蔵らも上京した。

鉦は上京すると、かねてから師事し指導を受けていた桂园派歌人の八田知紀⁷らに和歌を学び、祖父琴台からも多くの教えを受けた。また、絵師について絵の勉強をしつつ、凧、団扇や扇子に絵を描いて一家の家計を助けた。下田歌子は、生涯一貫して実学を重視し、「自営」できる女性の育成を進めたが、その背景には、こうした厳しい生活と労働の体験があった。

3 宮中出仕 — 「歌子」誕生

1872年 満18歳

満18歳になった1872（明治5）年10月、鉦の運命に大きな転機が訪れた。八田知紀とその高弟高崎正風⁸らの推挙によって宮中に出仕し、美子皇后（後の昭憲皇太后 1849-1914）に仕えることになったのである。その背景には、皇族や華族の関係者以外からも宮中奉仕の人材を集めようとする明治初年

- 6 「綾錦」の歌を刻んだ歌碑は、三国山山頂近くにも設置されている（1958年建立）。
- 7 桂园派は古今和歌集を尊重する和歌の流派で、江戸時代後期の香川景樹とその門流を中心とし、明治期にかけて大きな流派を形成した。八田知紀（1799-1873）は、旧薩摩藩士で、明治維新後、宮内省に入り、歌道御用掛を務めた。
- 8 高崎正風（1836-1912）は、旧薩摩藩士で歌人。御歌所初代所長、宮中顧問官、枢密顧問官などを歴任した。

の宮中改革があった。だが当時、地方の下級武士の娘が宮中に出仕することは異例のことだった。

この晴れの出仕の日、銚は次の歌を詠んだ。

敷島の道⁹をそれとも
わかぬ身に
かしこく渡る
雲のかけ橋

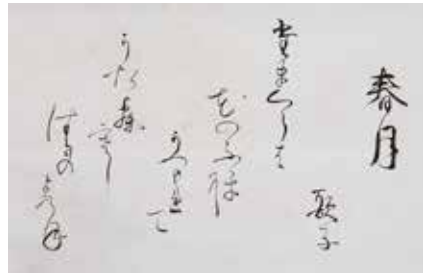
出仕後、銚は宮中の歌会で多くの歌を詠んだ。銚は皇后から和歌の才能を賞賛され、まもなく「うた」という名を賜った。以後、銚は「うた」あるいは「歌子」と名乗るようになる¹⁰。

次の歌は、「うた」という名を賜った答礼として詠まれたものである。

身につみて おき所無く
おもふかな
大内山¹¹に
たまはりしなを



美子皇后立像 1889年6月14日
鈴木真一撮影（「香川家史料」学習院大学
文学部史学科所蔵）



手枕は 花のふゞきに うづもれて
うたゝ寝寒し 春の夜の月

この「春月」の歌は、歌子の代表的な和歌として最もよく知られている。

9 「敷島の道」は和歌の道を意味する。

10 「改名届」を提出して正式に名前を「歌子」に変更したのは、1911（明治44）年である。

11 「大内山」は皇居を意味する。

宮仕えは歌子にとってまたとない学習の場となった。歌子は、宮中で行われるご進講¹²に同席して、元田永孚、福羽美静、加藤弘之などの学者らから、直接、和漢洋の学問を学び、後年の学校運営のもとになる様々な学問を身につけた。フランス人によるフランス語の講義にも出席した。

また、歌子は、「明治の紫式部」と呼ばれ歌人として名高い税所敦子（1825-1900）や、大正天皇の生母柳原愛子（1855-1943）など、宮中の女官たちと親交を深めた。とくに税所敦子とは、同じ武家の出自であることから、年齢は離れていたものの、宮中を辞した後も長く親交が続いた。

こうして歌子は皇后の信頼を得て、順調に昇格していった。出仕の際は最下位の十五等だったが、3年後の1875（明治8）年には権命婦¹³に任じられる。

宮中の衣服

明治政府は近代国家建設のために洋装化を進めたが、男性に比べ女性の洋装化は遅れた。下田が宮中に出仕していた明治初期、宮中の女官の服装は平安時代以来の伝統的な女房装束（十二単）の略装だった。

白い小袖の上に緋色（赤）の袴をはき、その上に単の袴を重ね着し、手に松扇を持つ。これを桂袴の装束といい、当時の女官の制服だった。下田は、後年イギリスのヴィクトリア女王に謁見する際にもこの桂袴を身につけた。

しかし、1880年代に欧化主義が進む中で、女性に対しても洋装が求められるよう



1891年 36歳頃
武林盛一撮影

12 天皇、皇后などの前で学者などが講義を行うこと。

13 明治以降の女官は、尚侍、典侍、掌侍、命婦などに区分され、さらにその中に等級があった。権命婦は、命婦の次の位。

になる。そうした中、美子皇后は1886（明治19）年、華族女学校の卒業式で初めて洋服を着用した。そして翌1887年、「婦女服制おぼしめしの思召書」を発し、洋服は「身体の動作歩行」に便利だとして、洋装化を奨励した。皇后は、以後、一貫して洋服を着用したとされる。

4

とうよう 桃夭学校の開始

1882年 満27歳

1879（明治12）年5月、満24歳のとき、歌子は旧讃岐国丸亀藩士下田たけ猛お雄と結婚し¹⁴、その年の11月、7年あまりの宮仕えを辞して結婚生活を開始した。猛雄は、旧藩時代は剣客として知られていたが、結婚後まもなく胃病を患い、長く病床に伏した。

歌子は、夫の看病に加え、両親と祖母、弟を抱えて苦しい生活を送っていたが、そうした歌子に新しい道が開かれた。伊藤博文、山縣有朋、佐々木高行、土方久元、井上毅こわしといった政府高官たちが、息女の教育を歌子に依頼したのである。

その要望に応え、歌子は1882（明治15）年3月、麴町区一番町（現在の千代田区九段南2丁目）の自宅に、「下田学校」（同年6月「桃夭学校」に改称）を開設した。「桃夭」という名称は中国の古典『詩経しきやう』に拠った言葉で、桃の若木のみずみずしさやうら若い女性た性に喩えたものである。

当初、桃夭学校に集まったのは政府高官の妻が多かったが、次第に上流階層の息女が増えて、200名を超えるようになった。桃



桃夭学校時代
左：本野久子、右：下田歌子

14 下田の結婚の時期に関しては、1880年3月という説もある。

天学校で学んだ本野久子^{もとの}¹⁵は、当時の様子を次のように回想している。

横浜の小学校を卒^おえて、東京に帰ってきた私は、父の意見により、まづ下田先生の塾にお世話になりました。明治12、13年の頃で、当時はまだ私共に通学できる女学校というようなものはなく、父もこの問題でずい分頭を悩ましたようですが、広い東京に、ともかく下田歌子先生のと、跡見花蹊^{かけい}¹⁶先生のお宅しか、女塾というものが無かったのでございます。(『下田歌子先生伝』185頁)

設立時の桃天学校は、孝経、四書、五経、徒然草、枕草子、栄花物語、源氏物語、古今和歌集、大日本史、本朝列女伝など、和漢文を中心とする武家の教養を教える「女塾」だった。しかし、翌1883(明治16)年には、修身、算術、歴史が加えられ、近代的な学校としての教育課程が徐々に整備されていく。

このように歌子は桃天学校の業務と看病で多忙な毎日を送るが、1884年5月、夫猛雄は失意のうちに37歳で没する。歌子は満29歳。5年ほどの結婚生活だった。歌子は夫の死に際し、思えばたいそう不思議な「縁」だったと歌に詠んでいる¹⁷。

人知れぬ 涙にのみも くれなるの
いと怪^{あや}しき 縁にこそありけれ

また、その翌月には、歌子にとって人生の師であった祖母 貞も89歳で他界する。

15 本野久子(1868–1947)は、旧長州藩土野村靖の長女で、外交官・政治家の本野一郎の妻。華族女学校の一期生で、下田の後を継いで愛国婦人会会長を務めた。

16 跡見花蹊(1840–1926)は、1875年、東京神田に「跡見学校」を設立した。

17 『香雪叢書 下田歌子著作集第2巻』(1932)所収。

下田歌子と津田梅子

女子英学塾（現在の津田塾大学）の創立者津田梅子（1864–1929）は、1871（明治4）年、満6歳のとき、岩倉具視^{ともみ}を団長とする遣欧米使節団（岩倉使節団）¹⁸に、4人の女子留学生とともに同行する。津田は、アメリカで初等・中等教育を受け、1882年に17歳で帰国した。

下田は、伊藤博文を介して津田を知り、桃夭学校の英語教師として迎える。当時、津田は日本語がほとんど話せなかったため、下田が津田に日本語を教え、下田も津田から英語を学んだと言われている。その後、下田と津田は、華族女学校でもともに教鞭をとる。



津田梅子 1901年 36歳
女子英学塾開校当時の肖像
(津田塾大学津田梅子資料室
所蔵)

5 華族女学校の開設と学監就任

1885年 満31歳

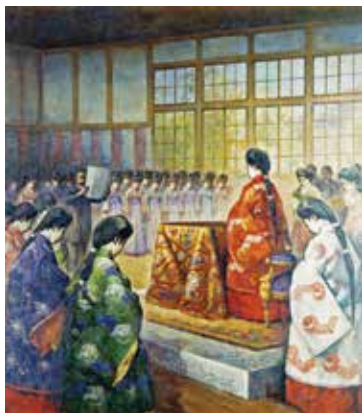
1877（明治10）年、東京の神田錦町に華族¹⁹の子女を教育するための「華族学校」が開設される（同年10月の開校式で「学習院」に改称）。開校当初の学習院は、男子小学、女子小学および中学によって構成されていたが、男子の教育を念頭において設立されたことから、女子の入学者は少なかった。そのため、学習院が官立学校となる際に、皇后の意向により女子を分離して

18 岩倉使節団は、木戸孝允^{なかとよし}、伊藤博文、大久保利通^{としみち}などの政府高官や留学生など、100名以上から成り、2年近くにわたって欧米各国を視察した。

19 明治政府は、1869（明治2）年に華族制度を創設し、1884年の華族令により、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵という五等級の爵位を設けた。華族制度は、戦後、日本国憲法の制定により廃止された。

「華族女学校」が開設されることになった²⁰。

下田歌子は、1884（明治17）年7月、奏任官相当の「宮内省御用掛」²¹に任命され、華族女学校開設の準備を担うことになった。華族女学校開設とともに幹事および教授に就任し、翌1885年11月に行われた開校式では、教師総代として祝辞を述べた。1886年にはさらに学監²²に就任した。以後、1907（明治40）年に53歳で辞任するまでの22年間、下田は華族女学校の管理運営と教育を中心的に担った。



華族女学校開校式 下田は窓側の前列右側から2人目。『華族女学校行啓（跡見泰）、聖徳記念絵画館蔵』



1903年 49歳頃

華族女学校の最初の入学者は143名²³で、そのうち約60名が桃夭学校から移籍した生徒だった。華族女学校開設にもなって桃夭学校は廃止されたが、親元を離れて就学する学生のために、寄宿制の「桃夭塾」が設けられた（桃夭女塾ともいう）。桃夭塾の寄宿生は、昼は華族女学校で学び、夜は親しく下田の教えを受けた。

華族女学校では、女性としての品性や倫理（女徳）を重視する一方、上流階級の女性の虚弱さを心配する皇后の意向により体育が奨励され、

20 当初、四谷尾張町に設置されたが、1889年に永田町に移転した。

21 奏任官は政府の役人（官吏）である「高等官」の一種。宮内省御用掛は宮内省の命により用務を担当する役職。

22 学監は「長の命を受け教授及校中の事務を監督す」（宮内省達第二号達、1886年）。

23 『女子学習院五十年史』（1935年）による。

年2回運動会が開催された。また、ネイティブ教員によるフランス語や英語の授業が設けられるなど、上流階層の女子に対してこれまでにない新しい教育が行われた。

下田は、華族女学校の業務の傍ら、教科書の編纂を進めた。1885（明治18）年に『和文教科書』（宮内省版、全3巻）を発行し、翌1886年には『国文小学読本』（全8巻）の刊行を始めた。

また、1893（明治26）年に、華族女学校での講義録をもとに、日本における初めての体系的・実践的な家政学教科書とされる『家政学』（全2巻）を刊行した。その改訂版である『新選家政学』（全2巻、1900年）は、中国でも翻訳・出版され、中国の女子教育に大きな影響を与えた。



『和文教科書』（1885年）
『国文小学読本』（1886-1887年）



『家政学』（1893年）

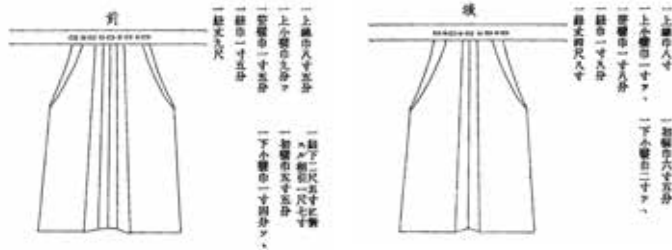
女袴の考案

下田は、女子学生の通学や体育用に「女袴」を考案したことで知られる。現在、大学などの卒業式で着られている袴は、下田が考案した袴が元祖である。

華族女学校は、1887（明治20）年、欧化主義の中で、女子学生に洋服の着用を義務づけた。しかし、なかなか洋装が普及しなかったことから、下田は女官の緋袴ひばかまを改良して、動きやすく着やすいスカート型の行灯袴あんどんを考案した。男性用の袴には襠まも（内股を仕切る布）があり、女性には不便だっ

たためで、これがいわゆる「女袴」である。

華族女学校で着用されるようになった女袴は、高等女学校の増加とともに、1900年頃から全国に広まる。それにともない、若い女性の髪形も、面倒な島田髷（日本髪）などの結髪に代わり、西洋風の束髪や結流しに変わっていった。



下田歌子「本校にて用ふる袴の起因及び製作」1901（明治34）年（細川潤次郎『女教一斑 第6編』）

6 欧米女子教育の視察と皇女教育 1893-1895年 満39-41歳

下田歌子は、明治天皇の第6皇女常宮昌子内親王（後の竹田宮妃）と第7皇女周宮房子内親王（後の北白川宮妃）のご教育掛の内命を受け、1893（明治26）年9月から1895年8月まで約2年間、西欧諸国の女子教育の状況を視察した。下田は、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、スイス、オーストリア、ベルギー、イギリス領カナダおよびアメリカを歴訪したが、



欧米視察で見聞した西欧の家庭生活や教育の様子は『泰西婦女風俗』にまとめられている。

主に滞在したのはイギリスのロンドンである。1年半におよぶロンドン滞在中、下田は、エリザベス・アンナ・ゴードン（またはゴルドン）夫人²⁴の協力を得て、皇女教育の実際や女子教育を詳しく見聞した。

また、ロンドン郊外にあるミセス・ホールドン・スクールやミス・キヌヤード女史経営の女学校で英語などを学ぶとともに、オックスフォード大学サマーヴィル・カレッジ、ケンブリッジ・トレーニング・カレッジ、チェルトナム・レディース・カレッジなど、イギリスの重要な女子教育機関を視察した。

下田のロンドン滞在中の1894（明治27）年7月に日清戦争が始まった。下田は、ヨーロッパの国々がアジアへの進出を企図しているを感じとり、「兄弟の国」である日清の戦争を憂える手紙を祖国に書き送っている。

帰国が近づいた1895年5月、下田は駐英米国大使夫人（ベイヤード夫



エリザベス・アンナ・ゴードン夫人
（早稲田大学図書館所蔵）



「英皇即位の肖像」下田がイギリス王室の女官から贈られたヴィクトリア女王の肖像画（『日本婦人』1900年第3号）

24 ゴードン夫人（Elizabeth Anna Gordon 1851–1925）は、ヴィクトリア女王に女官として仕えた後、オックスフォード大学で比較宗教学を研究する。アジアの宗教に関心を持ったゴードン夫人は、イギリス滞在中の日本人留学生を支援するとともに、研究のため数回日本を訪れる。1907年に来日した際には、下田と再会し、実践女学校を訪れている。1925年に京都のホテルで亡くなり、高野山の景教碑の傍らに墳墓が設けられた。早稲田大学にはゴードン夫人が収集した書籍や仏画などの「ゴルドン文庫」がある。

人)に随行して、イギリス ヴィクトリア女王 (1819-1901) に謁見した。このとき下田は、明治の女官装束である袴^{けいこ}を着用してバッキンガム官殿に向かった。このことは当時、『ロンドン・タイムズ』などで報じられ、イギリスの人々から注目を集めた。

下田は、この欧米視察を通して、国家興隆の基礎は女子教育にあると考え、とくに中流および一般庶民の女子教育を確立しなければならないという信念を抱いた。また、日本女性の体格が劣っていることを痛感し、体育の重要性を強く認識することになった。



日本の英字新聞『ジャパントイムズ』(1931年2月1日)で、下田の業績やヴィクトリア女王への謁見が紹介された。

欧米視察の航路

19世紀後半における長期の船旅は、船が小さく、運べる荷物も少なかったため、現在と比べると様々な困難があった。下田は、イギリスを拠点としてヨーロッパ各地を移動した後、アメリカ視察のため大西洋を渡った。さらに、アメリカを横断してカナダに向かい、最後はカナダから太平洋を渡って横浜に帰港した。

途中、華族女学校の同僚だった堀江義子と旧彦根藩士でフランス領事館での勤務経験のある鈴木貫一が同行している。

〔往路〕 1893年9月10日午前9時20分、横浜港からフランス船籍の「メルボルン号」で出港。10月19日にフランスのマルセイユに到着。
(約40日間)

〔大西洋横断〕 1895年7月4日イギリスのリバプール港から「ラブラドル号」で出港。7月13日にカナダ・モントリオールに到着。(約10日間)

〔復路〕 1895年8月5日カナダ・バンクーバーからイギリス船籍 Empress of India で出港。8月19日横浜港着。(約14日間)



帰国後、下田は華族女学校の学監に復帰するとともに、1896（明治29）年に正式に両内親王御用掛を拝命し、高輪御殿御学問所で皇女教育を開始する。当時、常宮内親王は9歳、周宮内親王は7歳であり、下田による皇女教育は1909年まで13年間続けられた。



常宮内親王 1897年頃
小川一真撮影（個人蔵・行田市郷土博物館保管）



周宮内親王 1897年頃
小川一真撮影（個人蔵・行田市郷土博物館保管）

7 帝国婦人協会と実践女学校の設立 1898年 満44歳

帰国して3年後の1898（明治31）年11月、下田歌子は欧米視察を通して胸に抱いた新たな構想を実現に移す。「帝国婦人協会」の設立である。下田はその会長に就任し、新時代に生きる若い女性たちの自覚を高め、女性の社会的地位の向上を図ろうと決意する。下田44歳のときだった。

下田の帝国婦人協会の構想は、次の5部門からなる壮大なものだった。



帝国婦人協会の事務所を麴町区元園町に開設

- 一 教育門 女子教育研究会 実践女学校 付属慈善女学校
女子工芸学校 附属^{かひ}下婢養成所 女子商業学校
- 二 文学門 女子文学研究会 女子文学出版所
- 三 工芸門 女子工芸研究会 女工養成所
- 四 商業門 女子商業研究会 勸工場
- 五 救恤^{きゆうじゆつ}門 女子救助会 慈善女子病院 看護婦養成所

このうち下田が最も力を入れたのが女子教育である。さっそく翌1899年4月、東京市麹町区元園町（現在の千代田区麹町）に、実践女子学園の前身である実践女学校（修業年限5年）と女子工芸学校（同3年、専科2年）を開校し²⁵、5月7日に開校式典を行った。開校式を行ったこの日が本学園の創立記念日となっている。



明治末期 1906年頃の渋谷校舎



渋谷校舎 10周年記念（1913年）

私立実践女学校規則

第1章 第1条 本校は本邦固有の女徳を啓発し、日進の学理を応用し、勉めて現今の社会に適応すべき実学を教授し、賢母良妻を養成する所とす

私立女子工芸学校規則

第1章 第1条 本校は女子に適當なる工芸を授け併せて修身齊家^{せい か}に必要な実業を修めしめ^よ能く自營の道を立つるに足るべき教育を施す所とす

25 同時期に「孤獨貧困なる女子に自活の道」を授ける実践女学校付属慈善女学校と、女子工芸学校附属下婢養成所が設置されたが、この2校は長く続かなかった。

下田は両校において「賢母良妻」を育成するとともに、「実学」や「実業」の教育を通して女性に「自営の道」を拓こうとした。このように、「実践」という校名には、実践的な教育によって「自立自営」でできる女性を育成するという下田の教育理念が込められている。



高等女学部（高等女学校）の校舎
大正期から昭和初期の頃

1899年2月に出された**高等女学校令**では、高等女学校の修業年限は4年であり、しかも1年短縮できると規定されていた。このことからすると、修業年限5年の実践女学校は、かなり教育レベルの高い学校だった²⁶。

最初の入学者は両校合わせて40名だったが、その後急増した。そのため、麴町の校舎はすぐに手狭になり、4年後の1903（明治36）年に東京府豊多摩郡渋谷村大字下渋谷常盤松（現在の渋谷キャンパス）に移転した²⁷。

ごりよう ときわまつ 御料牧場・常盤松・校歌

現在の渋谷キャンパス一帯は、江戸時代の末期、薩摩藩島津家の土地だった。明治以降、皇室の御料乳牛牧場となり、牧場が千葉県三里塚に移転した後は、使われないまま草原となっていた。下田は、そこに約2000坪の土地を借り受け、校舎を建設する²⁸。当時は交通の便が悪く²⁹、移転によりやむを得ず辞めた生徒も少なくなかったという。

この辺りはかつて常盤松といい（1928年以前は「常盤松」、千両の値打

26 なお、実践女学校はこの当時はまだ高等女学校としての認可を受けていない。文部省から高等女学校として認可を受けるのは1911（明治44）年である。

27 豊多摩郡は現在の渋谷、中野、杉並区と新宿区の一部。1932年に東京市に編入された。

28 さらに、宮内省から1922年約2500坪、1928年約4000坪、1931年に約1800坪の御料地の払下げを受けて、校地が拡大していった。

29 1885年に日本鉄道品川線（品川―赤羽間。後の山手線）が開通し、渋谷駅が設置された。1907年には玉川電気鉄道が開業し、1911年に東京市電青山線が渋谷まで延長された。

ちがあると言われた松の名木があった（東京大空襲で焼失）。本学の校歌にある「常磐の松」は、この松にちなんでいる。下田は、常磐松校地に移転した翌1904年に校歌を作るが、1932年に現在の歌詞に改めた。

〔旧〕千代のときはの松かげに ひらく学びの窓の竹
君が恵の露うけて しげれみさをの 色ふかく

〔現〕常磐の松のしたかげに ひらく教のには桜
君がめぐみのつゆあびて にほへ八島の外までも

実践女学校の制服

実践女学校では、1899年の創立当初から、和服の上に羽織る被布ひふが授業服または校衣として着用されていた。着物が華美なることを避けるとともに、裾すその乱れや汚れを防ぐというねらいがあった。校衣は在学生が縫い、新入生に贈る習わしがあったとされる。襟飾りとして用いられている打紐うちひもは、専門部が紫、高等女学校が緑、幼稚園は赤だった。

1920年代に入り、袴に代わって、セーラー服やジャンパースカートが全国の高等女学校の制服として採用されるようになると、本校でも、1923（大正12）年にワンピースが制服として導入される。当初はセーラーカラーではなく、夏は水色、冬は紺色だった。



高等女学校 1922 年度「記念写真帖」



高等女学校 1929 年度「卒業記念帖」

1931(昭和6)年に、ツーピース型のセーラー服が制服となり、現在の中学・高校に引き継がれている。

8 清国留学生の教育

1901-1911年

日清戦争(1894-1895)以後、清国は近代化の推進のため、日本への留学を奨励し、1911(明治44)年に辛亥革命が起こるまで、清国から多くの留学生が来日した³⁰。だが当初、官費留学生は男性のみだった。それは、当時の清国では女子は家で教育すべきものとされ、女学校の設立は公には認められていなかったからである。

下田歌子は、かねてから東アジアの連帯を強く願っており、とくに清国における女子教育の普及に貢献したいと考えていた。そのため、実際に留学生を受け入れる前から、**坂寄美都子**ら実践女学校の教師数人と中国語を勉強し、清国の女子留学生を受け入れる準備をしていた。

実践女学校に清国からの女子留学生が入学するのは1901(明治34)年からである。この年1名、翌1902年に4名が入学し、1904年には湖南省から来日した20名の留学生が入学した。湖南省の留学生は14歳から53歳までと年齢幅が広く、いずれも日本語はほとんど話せなかった。

下田は留学生のために、急ぎよ清国女子速成科の課程ひのきを設けた。そして、赤坂区 **檜町**(現在の港区赤坂9丁目)



清国留学生と坂寄美都子

30 清国は1636年から1912年まで続くが、1911年に始まった辛亥革命により滅亡し、1912年に孫文を大統領とする中華民国が誕生する。

の洋館を借り受けて、留学生のための分教場とした。

1907年、清国においてようやく官立の女学校が設立されることになり、それにともなって、女子留学生が急増した。そのため、同年、常磐松に留学生用の「松柏寮」を開設し、翌1908年には留学生のための課程として、3年制の中等科、師範科と2年制の工芸科を設けた。こうして実践女学校は、日本における清国女子留学生受け入れの中心的な教育機関となり、1911年頃まで100名近い卒業生を送り出した。

また、下田は清国への女性教員の派遣にも力を入れた。清国における初めての日本人女性教員として知られる河原操子^{みさこ}（1875-1945）は、下田の紹介で上海に渡り、その後、内蒙古の喀喇沁^{カラチン}で女学校の設立・運営に当たった。実践女学校の教員だった木村芳子（-1910）は、清国の皇族である肅親王^{しゅくしんのう}から要請を受け、北京で女学校を開設した。そして、下田の弟子とされる服部繁子（1872-1952）は、京師大学堂（1912年北京大学と改称）の開設に関わった中国哲学研究者の夫、服部宇之吉とともに、北京で女学校を開設した。

さらに、下田は1904年に、清藤秋子らと国際親善と文化交流を目的とする「東洋婦人会」を設立し、顧問に就任した（会長、鍋島栄子）。そして、1906年、東洋婦人会の事業の一環として清国派遣女教員養成所を設置し、日本人女性教員を清国に派遣した。

しゅうきん 秋瑾・孫文・西太后

実践女学校で学んだ清国留学生の一人に、革命運動により処刑された秋瑾（1875-1907）がいる（1905年入学）。秋瑾の日本留学には、服部繁子と服部宇之吉夫妻の勧めがあったとされる。

あるとき舎監の坂寄美都子が秋瑾の様子について下田に報告すると、下田が「よく見抜いて大きく扱えよ」と答えたというエピソードが残されている。

下田は、辛亥革命の指導者であり、中華民国の「国父」と言われる孫文（^{しゅうざん}孫中山 1866-1925）とも親交があった。孫文は下田にひとりの女子学

生の教育を依頼する手紙を送っており、1900年には下田が滞在していた日光を訪れて、下田と面談している。

また下田は、清朝末期に実権を握っていた西太后（1835-1908）に謁見する計画があったという。西太后の死により直接会うことはできなかったが、西太后から下田に直筆の「壽」の書幅（掛け軸）が贈られた（右の写真）。



喜寿記念 1930年 76歳頃

9

財団法人化と幼稚園の設置

1908年 満53歳

下田歌子は、1899（明治32）年に実践女学校・女子工芸学校を設立して以来、両校の校長としての任務と華族女学校学監の任務の両方を担ってきた。1906年4月に華族女学校が学習院に統合されて「学習院女学部」に改組された際には、初代の学習院女学部長に就任した。

しかし、下田はその翌1907（明治40）年11月に学習院女学部長を辞し、創設以来22年におよぶ華族女学校の職務に自ら終止符を打った。以後、下田は、実践女学校を中心として、女子教育の普及と発展にまい進する。

1908（明治41）年、下田はさっそく大きな改革を行う。同年4月、下田は女子工芸学校と実践女学校の補習科を廃止し、実践女学校内に中等学部（修業年限5年）と工芸部（本科3年、専科2年）を設けた。さらに、大学、短大の前身である高等専門学部（修業年限2年、文学科、家政科、技芸科）を設置した。そして、9月には私財を投じて財団法人とし、経営の安定を図った。これにより、正式名称を財団法人私立帝国婦人協会実践女学校とした。

また同じ年の4月に、下田は、渋谷で最初の私立幼稚園である**帝国婦人協会実践女学校付属幼稚園**を設立し、園長に就任した（1933年に実践幼稚園に改称）。対象児童は3歳以上、保育時間は午前9時から午後1時半までで、「戸外運動」など先進的な教育方法を取り入れていた。園児数は100名におよび、渋谷の幼稚園で最も多かったとされる。

なお、実践幼稚園は、太平洋戦争下の1944年に休止を余儀なくされ、1945年5月、園舎が戦禍により消失し、その後再建されることはなかった。



1911年の卒園記念。中央に下田園長、その右に青木副校長。後方の女子学生は清国留学生。

10 大学設立構想と専門学校の設立 1925年 満70歳

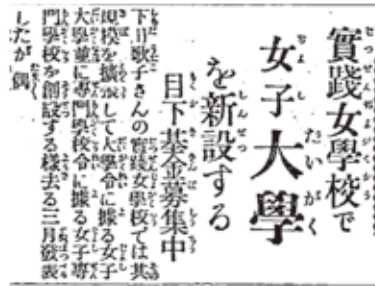
法人化以降、教育の充実をめざして様々な改革が行われる。1911（明治44）年3月に文部大臣から高等女学校の認可を受け、4月には高等女学校令に基づいて、中等学部が**高等女学部**と**実科高等女学部**³¹に分けられた。また、高等専門学部を**高等女学部専攻科**に変更し、**家政専攻科**と**技芸専攻科**を置いた。

31 実科高等女学部は、その後の変遷を経て、1934（昭和9）年に**実践第二高等女学校**に改組される。

○1911（明治44）年

<p>高等女学部（本科） 入学資格：12歳以上 修業年限5年 定員500名</p>	<p>高等女学部専攻科 入学資格：高等女学校修了者 修業年限2年 家政専攻科 定員30名 技芸専攻科 定員20名</p>
<p>実科高等女学部 入学資格：12歳以上 修業年限4年 定員300名</p>	<p>高等技芸部 入学資格：4か年の実科高等女学校修了者 修業年限2年 定員100名 裁縫、造花、刺繡、編物、押絵の5学科</p>

その後、1920（大正9）年4月には高等女学部専攻科に国文科を設置し、修業年限が3年に延長された。翌1921年には高等技芸部を廃止し、教員を養成する高等師範部（裁縫科、手芸科 修業年限3年、定員150名）が開設された。そして、1924年には専攻科に英文科が開設され、専攻科は家政、技芸、国文、英文の4専攻となった。



『読売新聞』1922年10月3日

このように、高等女学校修了者の教育機会を拡充していく中で、下田歌子は1922年3月に「実践女学校大学部・専門学部設立主意書」を発表し、女子大学設立構想を打ち出す。そして、大学令に基づく女子大学の設置が認められた暁には大学部を設置するとして³²、蜂須賀正韶、清浦奎吾、渋沢栄一などの協力を得て、募金活動を開始する。

この計画は翌1923（大正12）年9月に起きた関東大震災³³で頓挫するものの、専門学校の設置に向けて、寄付金をもとに新校舎の建設が進められた。そして、1925年に専門学校としての認可を受け、高等女学部専攻科が

32 1918（大正7）年に大学令が制定され、早稲田大学、明治大学、日本大学、國學院大学など、多くの私立大学が発足したが、女子大学の設置は認められなかった。

33 関東大震災の死者行方不明者は10万人を超えたとされるが、実践女学校の校舎は奇跡的にほとんど被害がなかった。下田は自ら陣頭指揮をとり、医師、看護師が常駐する臨時救護班を結成。教職員生徒とともに、学校を拠点として衣服の配給や炊き出しなどの救済活動を行った。

専門学部³⁴に昇格した。修業年限は3年であり、国文科、英文科、家政科、技芸科³⁴と予科³⁵が設置された（1932年に実践女子専門学校に名称を変更）。

1903（明治36）年制定の専門学校令により、すでに日本女子大学校、女子英学塾、聖心女子学院、東京女子大学などが専門学校に昇格していたが、こうして本学も正式な女子高等教育機関を持つこととなった³⁶。これにより、高等女学校修了者のための高等教育が大幅に拡充し、女学校の教師などとして活躍する女性を数多く輩出した。



ミス・ケアリーの講義
1929年度専門学部英文科卒業生「記念写真」



下田による修身講話
1931年度専門学部国文科卒業生「記念写真帖」

○1925（大正14）年

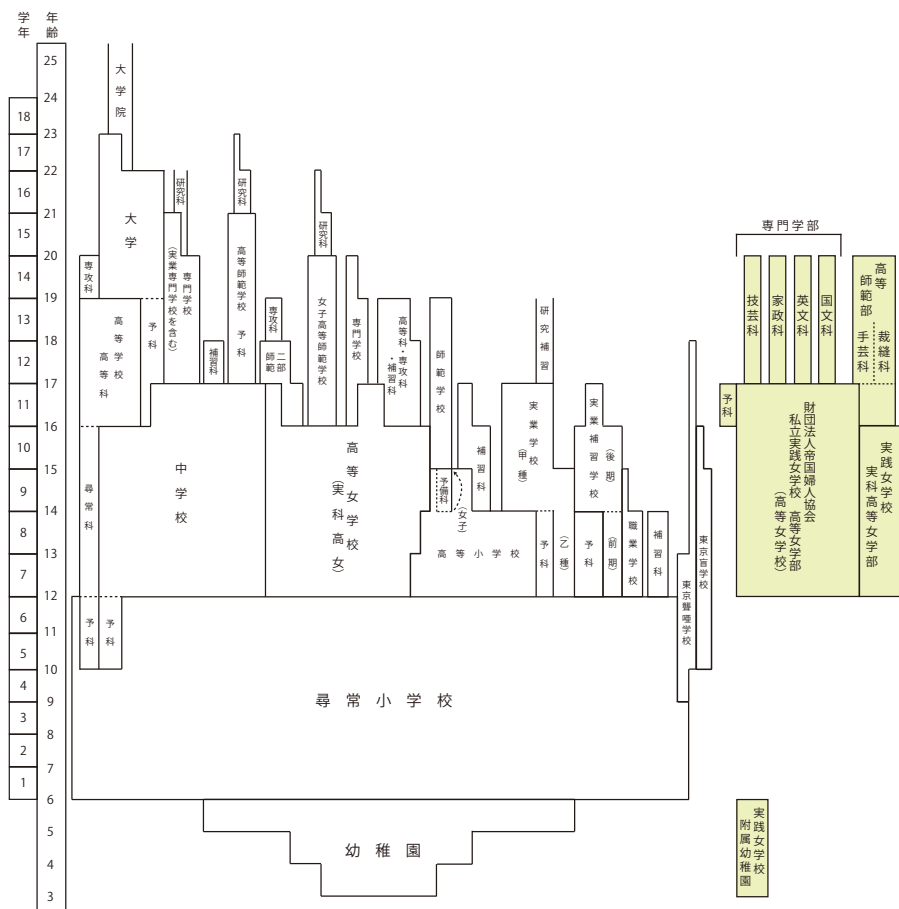
<p>高等女学部 修業年限5年</p>	<p>専門学部 入学資格16歳以上 修業年限3年 国文科 英文科 家政科 技芸科 定員合計600名 予科（国文・英文）定員計100名、修業年限1年</p>
<p>実科高等女学部 修業年限4年</p>	<p>高等師範部 修業年限3年 定員150名 裁縫科 手芸科</p>

34 家政科では衣食住一般に関する理論と実技を教え、技芸科では主に裁縫や手芸（刺繍、編物、造花、押絵）などの実技を教えた。

35 予科は、修業年限4年の高等女学校修了者が専門学部の国文科・英文科に進学するための1年制の課程である。

36 専門学校令は「高等ノ學術技芸ヲ教授スル学校ハ専門学校トス」と定めており、同法令により女子の高等教育機関として、女子専門学校が多く設立されるようになった。しかし、女子の高等教育進学率は男子に比べて低く、戦前を通じて1%に満たなかった。

1925（大正 14）年の実践女学校の構成



※ 1919年4月に施行された中学校令改正・高等学校令・大学令（いずれも）をもとに作成した。中学校には尋常小学校5年修了で、高等学校には中学校4年修了で各々入学する道も開かれていた。
 (文部省『学制百二十年史』「資料篇五学校系統図 大正10年」1992年、参照)

しやうくん 陸 勲 記念館

下田は、長年の功績が評価され、1908（明治41）年4月に従三位が授与された。そして、1927（昭和2）年には、勲三等に叙せられ、瑞宝章が授与された³⁷。

学園は瑞宝章の受章を記念して、翌1928年に「陸勲記念館」を建設した。鉄筋コンクリート4階建ての館内には、職員室、校長室、貴賓室、図書室などが設けられたが、第二次大戦末期の空襲で一部を残して焼失した。写真の正面の建物が陸勲記念館。右手は旧第一鉄筋校舎（1931年撮影）。



源氏物語講義

『源氏物語』の研究は、下田にとって重要なライフワークだった。下田の源氏物語講義は、早稲田大学の坪内逍遙の「シェークスピア講義」と並ぶ名講義と言われ、本学の学生だけでなく、他の学校の学生なども聴きに來た。

下田は晩年、長年の研究成果をまとめ、『源氏物語講義 首巻』(総論及梗概



1932（昭和7）年頃 国文科の講義

37 国家・社会に対して功績のある人を表彰する制度に、「位階」「勲章」「褒章」の三つがある。従三位は、長く官職にあった人や大きな功績のあった人に贈られる「位階」の一つ。また、瑞宝章は、「国家又ハ公共ニ対シ積年ノ功劳アル者」に対して与えられる「勲章」であり、2003（平成15）年の栄典制度改正以前は「勲一等」から「勲八等」までであった。

1934年)と『同 第1巻』(桐壺・帚木・空蟬 1936年)を出版した。それ以降の巻は生前に出版されなかったが、残されていた草稿を翻刻して、2002(平成14)年に『源氏物語講義 若紫』(板垣弘子編輯)が出版された。

11 女子教育の普及活動と愛国婦人会の活動

下田歌子は、中流階層以上の女子だけでなく、小学校を卒えて働く貧しい勤労女子にも教育を普及するために、多くの学校の設立や運営に携わった。下田が関わった学校では、授業料が無償または低廉で、教材や用具の貸与・贈与が行われた。また下田は、働く女子のための通信教育を行う「大日本実修女学会」を設立し、実践女学校には夜間高等女学校を設置した。

○下田が設立・運営に関わった主な学校

- 1899年 帝国婦人協会慈善女学校設立(東京)
- 1899年 帝国婦人協会北越支会附属女子工芸学校開設(柏崎)
- 1900年 帝国婦人協会新潟支会附属裁縫伝習所開設 校長
- 1908年 武田裁縫女学校設立(東京)
- 1910年 北見女学校設立(北海道)
- 1918年 順心女学校設立(東京)校長
- 1919年 淡海女子実務学校設立(滋賀)顧問・校長
- 1921年 明德女学校設立(東京・通信省貯金局内)校長
- 1922年 文化夜間女学校設立(東京・順心女学校の施設を利用)顧問
- 1924年 愛国夜間女学校設立(東京)校長

【新潟女子工芸学校】(現在の新潟青陵大学・短期大学部・高校)

下田は、1899(明治32)年夏、帝国婦人協会の普及のために長野と新潟を訪れる。下田の考えに共鳴した新潟県知事夫人の勝間田千代子らが、翌

1900年4月に、帝国婦人協会新潟支会と付属裁縫伝習所を設置する。裁縫伝習所は同年7月に「新潟女子工芸学校」と改称される。

【順心女学校】(現在の広尾学園中学校・高等学校)

順心女学校は、1918（大正7）年に大日本婦人慈善会（共愛会）の事業として、板垣絹子（板垣退助夫人、1859-1938）らによって設立される。下田は、初代校長に就任する。その後1924年に順心高等女学校となり、実践女学校の姉妹校という位置づけで、同じ方針で教育が行われた。

【淡海女子実務学校】(現在の淡海書道文化専門学校)

現在の滋賀県東近江市五個^{ごかしょう}で近江商人の家に生まれた塚本さと（1843-1928）が、和歌を通して知りあった下田歌子に感銘を受け、1919（大正8）年、77歳のとき「淡海女子実務学校」を設立した。下田は、杉浦重剛、嘉悦孝子とともに顧問となり、1925年に高齢の塚本さとに代わって2代目校長に就任。その後、4年制の高等女学校とし、校名を「淡海実践女学校」に改めた。

下田はまた、自ら設立した帝国婦人協会だけでなく、様々な婦人団体で活躍した。なかでも、1901（明治34）年に奥村五百子（1845-1907）が病傷兵や戦没兵士の遺族を救済するために組織した愛^い国^{おこ}婦人会には、設立発起人の一人として加わり、1920（大正9）年、66歳のとき、第5代会長に就任する。愛国婦人会は当時100万人の会員を擁する日本最大の婦人団体であり、下田は皇室関係者や華族以外で初めて就任した会長だった。

下田は会長就任後、日本国内はもとより、樺太、京城、満洲などを訪れて講演を行い、愛国婦人会の活動を広げた。また、婦人職業紹介所、授産所、託児所、児童図書館などを開設して婦人の生活改善を図った。

こうして、下田は、1927（昭和2）年に会長を退任するまでの6年7か月の間に、愛国婦人会の活動を社会救済事業へと大きく拡大した。このように下田は中上流階層の女子教育を担う一方で、女性を貧困から救済するための様々な事業を展開したのである。



1921（大正10）年9月、愛国婦人会函館・樺太支部総会
に向かう途中、盛岡市で行った下田の講演会

12 顕彰碑の建立と逝去

1936年 満82歳

下田が81歳を迎えた1935（昭和10）年8月8日、故郷の岩村城址に下田歌子顕彰碑（綾錦の碑）が建立された。下田は本学の教職員、生徒、同窓生等40数名とともに汽車で岩村に向かい、地元の人々とともに除幕式に出席した。下田はこのとき、お世話になった地元の方々に「春月」の歌と竜胆^{りんどう}の絵を染め抜いた富士絹の風呂敷を謹呈している。下田が亡くなる1年あまり前のことだった。

下田は、晩年病気が重くなってからも車椅子に乗って講話をし、それまで



下田歌子顕彰碑（岩村 城址公園）
1935年8月8日、下田の81歳の誕生日を記念して、除幕式が開催された。碑には綾錦の歌が刻まれている。

きなくなると校長室に生徒を集めて訓話をした。生徒たちは、下田の病状がいよいよ重篤になると、快癒を願って毎朝授業が始まる前に明治神宮に参拝したという。

くれたけの ふしどのうちに 学び得し
道を伝へむ 待てや教へ子

まよひなき 正しき道は 見ず聞かず
言わずむなしき 空にみちたり



校長室にて 80 歳頃

下田が教え子に残した最後の和歌である。

1936（昭和11）年10月8日 肺水症のため逝去。享年82歳。

幕末の動乱期に少女時代を過ごし、明治以降の近代化の時代に西欧文化と日本文化の融合を求め、あるべき日本人女性を創造しようとした下田歌子。下田は、中上流階層の女性も貧しい女性も、そして、日本人女性も中国人女性も、あらゆる女性が教育を受けられる社会の実現をめざして、「迷いなき道」を歩み続けたのである。

墓所は東京都文京区の護国寺にあり、故郷の岐阜県恵那市岩村町の乗政寺山墓地には、夫の下田猛雄の墓碑と並んで下田の墓碑が建てられている。

13 下田歌子の想いを受け継ぐ

下田歌子の死後、姪の平尾寿子（^{かずこ}-1986）が第2代理事長に就任する。

第二次世界大戦下では修業年限が短縮され、1944（昭和19）年に英文科

が募集を停止して歴史科が設置される。やがて戦火が拡大する中、1945年5月25日の大規模空襲³⁸により、多くの校舎が消失することになった。

1945年8月15日に終戦を迎える。本学はわずかに焼け残った校舎を応急修理して9月から授業を再開した。そして、戦後の学制改革により³⁹、本学園は1947（昭和22）年に中学校、1948年に高等学校を発足させ、1949年に実践女子大学、1950年に短期大学を設立する。かつて下田が打ち出した女子大学構想が、30年近い時を経て、ようやく実現したのである。

下田は、本学園の設立に当たり、アメリカの詩人、ウィリアム・ロス・ウォレス（William Ross Wallace 1819-1881）の次の言葉を引いて、女子教育の意義を世に訴えた。

ようらん
揺籃を揺るがすの手は、もってよく天下を動かすことをうべし

「揺籃」(揺りかご) をゆらす手、すなわち、女性こそが「天下」を動かすことができるという意味である。本学の建学の精神である「女性が社会を変える、世界を変える」は、こうした下田の想いに基づいている。

しかし、今や女性が手にしているものは揺りかごだけではない。下田が願ったように、女性たちは今、それぞれが自らの力を発揮し、社会の様々な分野で活躍している。

本学園はこれからも、創立者下田歌子の想いを受け継ぎ、女性の力と可能性を信じて、女性がさらに活躍する社会を創るために貢献していく。

38 1945年3月10日夜間の東京大空襲は、死者10万人、罹災者は約300万人にのぼったとされる。5月25日の空襲では、渋谷、青山周辺が焼け野原となった。

39 1947年に新制中学が発足し、中学校が義務教育となった。1948年に新制高校と新制大学が発足し、戦前認められなかった女子大学がようやく誕生した。1948年に私立大学11校、1949年には私立大学81校、国立大学70校が設立された。

14 下田歌子の主な著作

下田歌子は膨大な著作を残しており、単行本だけでも80冊を超える。

*発行年順

『泰西婦女風俗』大日本女学会 1899年

『家庭文庫』全12冊 博文館 1897-1901年

『少女文庫』全6冊 博文館 1901-1902年

『新編女子のつとめ』成美堂 1902年

『女子自修文庫』全5冊 富山房 1904-1912年

『女子之修養』弘道館 1906年

『皇國ぶり』アーサー・ロイド、松浦一訳、

春陽堂 1907年

『婦人常識の養成』実業之日本社 1910年

『婦人礼法』実業之日本社 1911年

『良妻と賢母』富山房 1912年

『日本の女性』実業之日本社 1913年

『礼法家事婦人修養十講』

東京国民書院 1914年

『家庭』実業之日本社 1915年

『結婚要訣』三育社 1916年

『香雪叢書 下田歌子著作集』全5巻

実践女学校出版部 1932-1933年

『源氏物語講義』「首巻」「第1巻」

実践女学校出版部 1934、1936年



『日本婦人』は帝国婦人協会の機関誌（1899年11月～1910年9月）



『香雪叢書 下田歌子著作集』



『結婚要訣』

【実践女子学園の出版物】

板垣弘子編 『下田歌子著作集 資料編』全9巻

実践女子学園 1998-2002年

板垣弘子編輯 『源氏物語講義 若紫』実践女子学園 2002年



【新編下田歌子著作集】

下田歌子記念女性総合研究所監修

『新編下田歌子著作集』全5巻 三元社 2016-2020年

第1巻 婦人常識訓 伊藤由希子校注

第2巻 女子のつとめ 伊藤由希子訳

第3巻 女子の心得 湯浅茂雄校注

第4巻 結婚要訣 久保貴子校注

第5巻 良妻と賢母 久保貴子校注



『新編下田歌子著作集』

【主な参考文献】

『下田歌子先生伝』故下田校長先生伝記編纂所 1943年

『実践女子学園八十年史』実践女子学園 1981年

『実践女子学園100年史』実践女子学園 2001年

『創立120周年記念 実践女子学園史1999-2018』実践女子学園 2020年

年表：下田歌子と実践女子学園

西暦年	和暦年	月	事 項
1854	嘉永7年 安政元年	8.9	改元前の嘉永7年8月9日(8日という説もある)、美濃国岩村藩藩士平尾録蔵および妻房の長女として誕生。幼名鉞(せき)。
1871	明治4年	4	前年に宣教使史生に任ぜられて単身上京した父の後を追って上京〔16歳〕。
1872	明治5年	10	八田知紀、高崎正風らの推挙によって宮中に出仕〔18歳〕。
1875	明治8年	5	権命婦に任ぜられる。
1878	明治11年	9	祖父、東条琴台没(84歳)。
1879	明治12年	5	旧讃岐国丸亀藩藩士下田猛雄と結婚(1880年3月という説もある)〔24歳〕。
		11	宮中奉侍を辞す。
1882	明治15年	3	私立下田学校を東京市麹町区一番町に創設〔27歳〕。6月下田学校を桃天学校と改称。
1884	明治17年	5	夫、下田猛雄没(37歳)。
		6	祖母、貞没(89歳)。
		7	宮内省御用掛に任ぜられる。
1885	明治18年	9	華族女学校開設にともない、幹事および教授に任ぜられる〔31歳〕。
		11	華族女学校の開校式。皇后が開校式に行啓。下田は教師総代として祝辞を上奉する。
		12	桃天学校の生徒が華族女学校に移る。桃天学校閉校。寄宿舎が桃天塾となる。
		12	『和文教科書』(宮内省版、全3巻)を刊行。
1886	明治19年	5	『国文小学読本』(全8巻)を刊行。
1893	明治26年	4	『家政学』(全2巻)を刊行。
		9	内親王御用掛として欧米各国の女子教育の視察のため渡欧〔39歳〕。
1894	明治27年		イギリス・ロンドンを中心に、フランス、ドイツ、イタリアなど、8か国の女子教育などを視察する。
1895	明治28年	5	バッキンガム宮殿においてイギリスのヴィクトリア女王に拝謁。
		8	欧州視察を終えて帰朝。華族女学校学監に復職。
1896	明治29年	5	常宮および周宮両内親王御用掛を拝命し、教育の任に当たる。
1898	明治31年	2	父、録蔵没(81歳)。
		11	帝国婦人協会を結成し、会長に就任する。

西暦年	和暦年	月	事 項
1899	明治32年	4	帝国婦人協会私立実践女学校、女子工芸学校を創設し、校長に就任する〔44歳〕。
		5	実践女学校付属慈善女学校を開設する。校服を制定。
1900	明治33年	4	帝国婦人協会新潟支会が設立され、付属裁縫伝習所を開設する。
		夏	日光で来日中の革命家孫文と会談。支援を約束する。
1901	明治34年	5	同窓会発足。清国留学生1名入学。
1902	明治35年	3	同窓会会則制定。校同窓会と命名され、4月に第1回校同窓会を開会。
		7	清国女子留学生4名を迎え、特設課程「清国女子速成科」を置く。
1903	明治36年	4	実践女学校・女子工芸学校、麹町区元園町より渋谷村常盤松の新校舎に移転。
		5	新校舎で開校式を挙行。
1904	明治37年	6	国際親善と文化交流をめざして東洋婦人会を結成。顧問に就任。
		7	校歌制定。
		11	清国湖南省有志の委嘱により学生20名を受け入れる。
1905	明治38年	6	母、房没（76歳）。
		8	赤坂区檜町に留学生仮分教場を設置。留学生部を中等科・師範科・工芸師範科に分ける。
1906	明治39年	2	清国留学生部分教場を渋谷の実践女学校内に移転。
		4	学習院教授兼女学部長に就任。
1907	明治40年	5	清国奉天省より、官費留学生23名、私費留学生21名を迎える。
		11	学習院女学部長を辞す〔53歳〕。
1908	明治41年	3	卒業式に来日中のゴードン（ゴールドン）夫人を招く。
		4	女子工芸学校と実践女学校の補習科を廃止して、実践女子校内に中等学部と工芸部を設置。高等専門学部（文学科、家政科、技芸科）を設置。
		4	実践女学校付属幼稚園を開設（1933年に実践幼稚園に改称）。従三位に叙せられる。
		9	財団法人を組織し、正式名称を私立帝国婦人協会実践女学校とする。
1911	明治44年	4	文部大臣より高等女学校の認可を受け、中等学部を高等女学部と実科高等女学部に分ける。
		4	高等専門学部を廃止して、高等女学部専攻科（家政、技芸）と高等技芸部を設ける。

西暦年	和暦年	月	事 項
1911	明治44年	6	東京市赤坂区長に「歌子」とする改名届けを提出〔56歳〕。
1916	大正5年	7	校友会誌『なよ竹』第1号発刊。
1918	大正7年	4	順心女学校（東京・麻布）の校長に就任。
1919	大正8年	8	直心影流園部秀雄教員による薙刀指導を実施。翌年より正課とする。
1920	大正9年	4	高等女学部専攻科に新たに修業年限3年の国文科を設置。国文・家政・技芸の3科とする。
		9	愛国婦人会第5代会長に就任〔66歳〕。1927年4月退任。
1921	大正10年	3	高等師範部の設置が認可され、高等技芸部を修業年限3年の高等師範部とする。1933年度廃止。
		6	逋信省貯金局女子従業員のために明德女学校を設立し、校長に就任。
1922	大正11年	3	女子大学等の設置をめざし、「実践女学校大学部・専門学部設立主意書」を発表。
		4	文化夜間女学校（順心女学校内）の顧問となる。
1923	大正12年	4	弟、錦蔵没（64歳）。
		9	関東大震災による惨害に対し、困窮者の救済に献身する。
1924	大正13年	1	高等女学部専攻科に英文専攻科を設置。
		4	愛国夜間女学校の校長に就任。
1925	大正14年	1	専門学校令により、高等女学部専攻科が専門学部に昇格改称（就業年限3年）。
		4	淡海女子実務学校（滋賀県）の2代目校長となる（1930年辞任）。名称を淡海実践女学校と改称。
1927	昭和2年	4	専門学部に就業年限1年の研究科を設ける（国文・英文・家政・技芸）。
		10	勲三等に叙され、瑞宝章を受ける。
1928	昭和3年	11	下田校長陸勲記念館竣工式を挙げる。
1929	昭和4年	4	実践女学校付属夜間高等女学校開校。1938年廃止。
1932	昭和7年	4	実践女子専門学校、実践女子高等女学校、実践実科高等女学校に改称。
		4	専門学校研究科に国史研究科を増設、技芸科研究科を裁縫科と手芸科に分ける。
		11	校歌を改詞し、一部改曲。
		11	『香雪叢書』第1巻を発刊（実践女学校出版部）。1933年5月全5巻刊行。
1934	昭和9年	4	実科高等女学校の組織を改め第二高等女学校と改称する。

西暦年	和暦年	月	事 項
1934	昭和9年	4	『源氏物語講義』首巻（総論及梗概）発行（実践女学校出版部）。
1935	昭和10年	3	専門学校に家政研究生（修業年限1年）を新設。
1935	昭和10年	8	岐阜県恵那郡岩村町に下田歌子顕彰碑を建設。除幕式を行う。
1936	昭和11年	5	『源氏物語講義』第1巻（桐壺・帚木、空蟬）発行（実践女学校出版部）。
		10.8	下田歌子逝去。享年82歳。
		10.13	故下田校長の校葬を執行。
		11	理事長に平尾寿子（かずこ）就任。
1947	昭和22年	3	財団法人帝国婦人協会実践女学校を財団法人実践女子学園と改称。
		4	実践女子学園中学部、同第二中学部設置。
		12	実践中学部及び第二中学部を実践女子学園中学校及び第二中学校に改称。
1948	昭和23年	4	中学校・第二中学校を合併して実践女子学園中学校と改称。
		4	実践女子学園高等学校設置。
1949	昭和24年	4	実践女子大学設立。文家政学部（国文・英文・家政学科）を設置。
1950	昭和25年	4	実践女子学園短期大学設立。家政科を設置。
1951	昭和26年	2	財団法人実践女子学園から学校法人実践女子学園へ組織変更。
1952	昭和27年	4	短期大学に国文科・英文科を設置。
1955	昭和30年	10	渋谷校地に「香雪記念館」落成（下田歌子の遺品等を展示、保存）。
1965	昭和40年	4	日野大坂上校地に大学教養課程を移転。校舎、日野寮、プール竣工
		4	文家政学部を文学部（国文、英文学科）と家政学部（食物、被服学科）に分離。
1966	昭和41年	4	大学院（修士課程）文学研究科に国文学専攻と英文学専攻、家政学研究科に食物栄養学専攻を設置。
1969	昭和44年	2	実践女子大学・同短期大学後援会設立。
		4	大学院文学研究科に博士課程を設置し、国文学専攻を置く。
1976	昭和51年	4	日野市神明校地に短期大学の校舎竣工。日野市に移転。
1979	昭和54年		創立80周年を記念して実践女子大学文芸資料研究所設立。
1985	昭和60年	4	文学部に美学美術史学科設置。
1986	昭和61年	4	実践女子大学、大学院が日野校地に全面移転了。
		10	学祖下田歌子逝去50年祭を挙行。
1987	昭和62年	7	日野校地大学図書館に向田邦子文庫を開設。

西暦年	和暦年	月	事 項
1989	平成元年	4	大学院家政学研究科に被服学専攻（修士課程）を設置。
1992	平成4年	4	大学院文学研究科に美術史学専攻（修士課程）を設置。
1995	平成7年	4	大学家政学部が生活科学部に名称変更。食物学科を食生活科学科、被服学科を生活環境学科に名称変更。生活文化学科設置。
1999	平成11年	4	大学院家政学研究科を生活科学研究科に、被服学専攻を生活環境学専攻に名称変更。
		5	創立100周年記念式典を東京国際フォーラムで開催。桜ホール、香雪記念館、事務センター竣工。
2000	平成12年	4	短期大学日本語コミュニケーション学科、英語コミュニケーション学科、生活福祉学科、食物栄養学科の4学科に改組改称。
2002	平成14年	7	香雪記念資料館を設立。
2004	平成16年	4	人間社会学部人間社会学科を設置。
		5	学祖下田歌子生誕150年記念式典開催。
2005	平成17年	4	大学院生活科学研究科食物栄養学専攻博士課程（後期）設置。
2007	平成19年	4	生活科学部生活文化学科生活文化コース・保育士コースを生活文化専攻・幼児保育専攻に変更。
2010	平成22年	4	大学院人間社会研究科人間社会専攻（修士課程）設置。
2011	平成23年	4	人間社会学部に現代社会学科設置。大学院文学研究科美術史学専攻博士課程（後期）設置。
2013	平成25年	4	生活科学部食生活科学科に健康栄養専攻設置。
2014	平成26年	4	渋谷校地に「創立120周年記念館」竣工。文学部、人間社会学部、短大が渋谷キャンパスに移転。
		4	生活科学部に現代生活学科設置。生活科学部生活文化学科生活文化専攻を生活心理専攻に名称変更。
		4	実践女子短期大学を実践女子大学短期大学部に名称変更。
		4	実践女子学園下田歌子研究所設置。
2018	平成30年	4	実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所に名称変更。
2019	令和元年	5.7	岐阜県恵那市岩村町において「創立120周年記念式典」を挙行。

主に『創立120周年記念 実践女子学園史1999-2018』の年表をもとに作成。

[] 内の下田の年齢は満年齢。ただし他の親族の（ ）の年齢は数え歳。

1873（明治6）年1月元旦以降、新暦（太陽暦）を採用。それ以前の日付は旧暦に基づく。

下田歌子小伝

下田歌子と実践女子学園の歩み

2022年 1月 10日

発行

実践女子学園

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1

監修

安達 勉 (実践女子学園常勤監事)

編集委員

下田歌子記念女性総合研究所

所 長 広井 多鶴子 (人間社会学部 教授)

専任研究員 久保 貴子 (実践女子大学 専任講師)

客員研究員 小林 修 (実践女子大学短期大学部 名誉教授)

実践女子大学図書館

大塚 宏昌 (元部長)

奥島 尚樹 (参事)

印刷

日野テクニカルサービス株式会社

〒191-8660 東京都日野市日野台3-1-1 (日野自動車株式会社内)